

第12回 (1978年) 夏季大学アンケート結果について

気象教育と普及の委員会

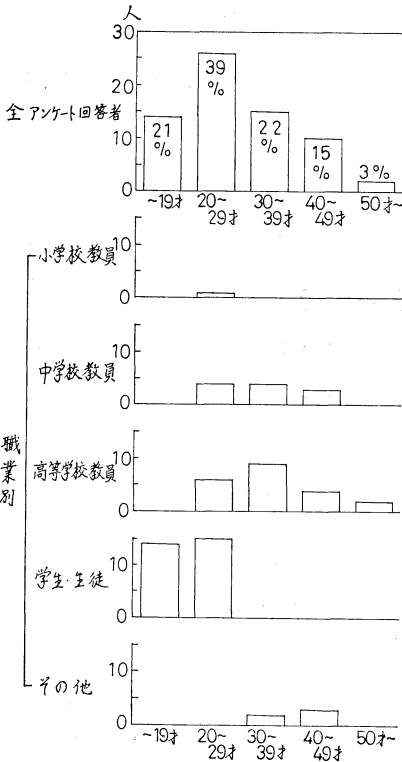
第12回夏季大学は、1978年7月25日から28日まで4日間に亘って気象庁講堂で行なわれた。最終日28日午後には、気象庁内の見学が行なわれる予定であったが、台風の接近に伴い気象庁業務に臨時体制が敷かれたことにより残念ながら中止された。その他の講義・実習は、順調に進められ参加総数104名で大半が全講義に出席し、出席者の熱意の程がうかがわれた。講義の内容・方法などについて出席者の意見を聴くために出席者に対してアンケートをお願いし、67名から回収された。以下にそのまとめと、出席者の特徴的な意見を披露しておきたい。

第1図は、出席者の年齢構成を示すが、30歳未満の若い人達だけで60%に達し、最年少は13歳であった。職業別には、第2図に見られるように、小・中・高教員が49

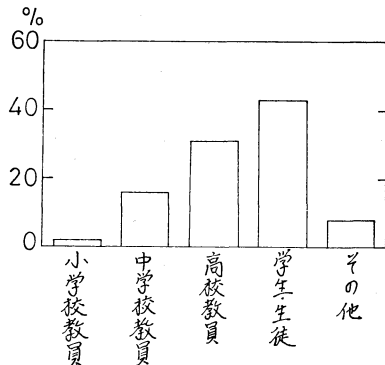
%、学生・生徒が43%である。教員と学生の年齢構成は特徴的で、学生の場合は当然のことながら全員30歳未満であるが、教員の場合にはいわば中堅教員である30歳代を中心に幅広く分布している。

今回までの夏季大学への参加回数は、第3図に見るように全体としては初めてという人が69%で非常に多い。しかし、3回目以上という人も22%もあり、主催者側を勇気づけるものである。職業別に見ると、学生・生徒と教員ではその特徴がはっきりし、学生・生徒ではその93%が初めての参加であるのに対し、教員ではその割合は55%である。学生・生徒の出席目的は「自分の勉強のため」あるいは「趣味で」ということでまとめて表現してよいであろう(第4図)。教員の場合は、「学校教育に役立てるため」という目的が強くでているが(70%)、そのような目的を持たず別な目的で出席する人が30%もいることは注目に値するであろう。

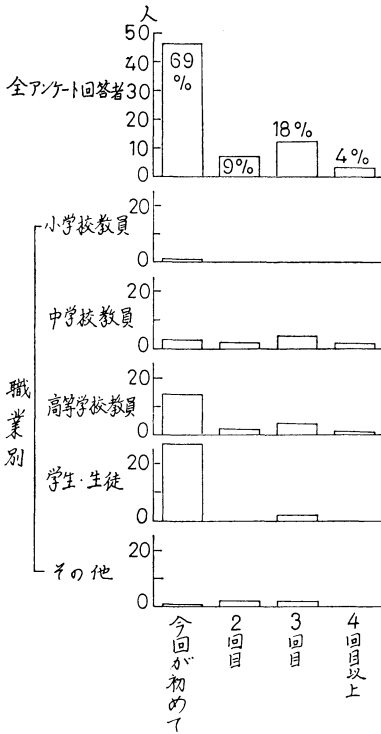
講義の難易については、第5図に表わされるように、ほとんどの出席者がちょうどよいとし、難しすぎる、あるいは易しすぎるという人が極端に多くなるという結果は示されていない。講義毎に見ると若干「ちょうどよい」とした人の割合に差があるようだが、比較的専門的で、親しみにくいテーマのものに若干「ちょうどよい」と感じた人が少ないようである。いずれの講義についてもその難易度の評価はよく、講師の諸先生の御尽力に感



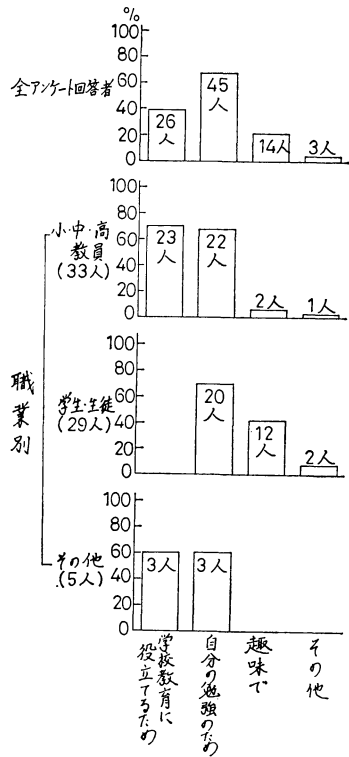
第1図 アンケート回答者の年齢構成 (総数66)。



第2図 アンケート回答者の職業分布。



第3図 今回までの夏季大学への参加回数。



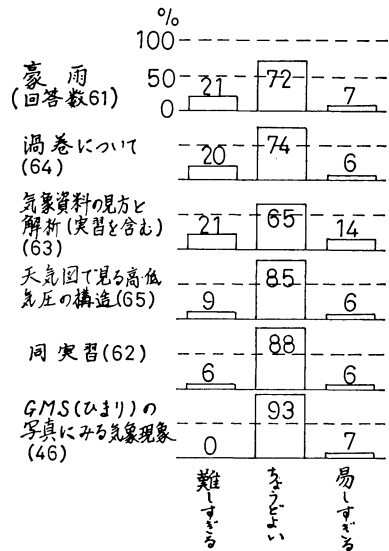
第4図 出席目的別人数(二つ以上の目的をもつ人がいるため合計は100%を越す)。

謝するものである。

第6図には、1テーマ2時間～2時間半という長さについての感想の分布を示したが、「ちょうどよい」とする人が非常に多い。しかし、途中で短い休憩をはさんで欲しいという書き込み意見は、今後の夏季大学の企画において考慮されるべきことであろう。

今回の夏季大学について最初どのようにして知ったかという質問の答えは、第7図に示されている。「天気」などの雑誌や都内各高等学校への案内状もそれなりの役割を果たしているが、「他人から聞いた」「学校のサークル活動で知った」「学校で聞いた」などのいわゆる口コミ的情報が46%に達し、大きな役割を果たしている。なお、口コミ情報で知った人の中にはあとで「天気」を見たという人もいるが、「天気」と「地学教育学会誌」の役割が同じ程度だったということは、気象学会としては知っておいてよいことであろう。

以上のような統計的処理の可能な設問のほかに、今後取り上げて欲しいテーマや企画などいくつかの項目に分けた上で広く意見を自由に書き込んでもらった。以下にその特徴点を挙げておきたい。



第5図 講義の難易度について。

第1表 希望の多い講義・テーマ [現象別]

希望テーマ	希望者数
台風	11
雲	7
雷	5
小気候・小気象	4
長波長波動	4

(希望者が3名のもの)

放射と熱収支, 異常気象・気候変動, 大循環, 災害

(希望者が2名のもの)

雪, 前線, 山岳気象, 梅雨, 海洋気象

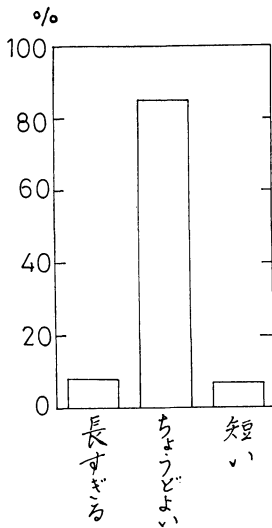
[現象に関すること以外のテーマ]

(希望者が4名のもの)

個人研究法

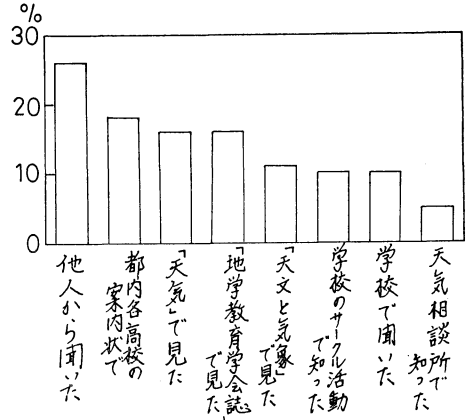
(希望者が2名のもの)

気象学の各専門分野の最近の話題, 観測から予報や注意報が出るまでの気象庁業務, 気象の実験・観察

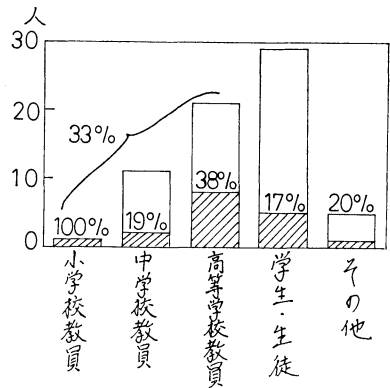


第6図 1テーマ約2時間という講義時間の長短について (回答数59)

まず, 今後取り上げてほしいテーマであるが, 台風や雷など独立的現象も目立つが, 波動や放射などの大気物理の基礎などの知識に対する希望も多い。これらの希望をどう取り入れるかは, 初めての参加者が多いその都度の夏季大学では困難も多い。台風は, 既に特集として取



第7図 今回の夏季大学をどこで知ったか (回答数38, 合計は100%を越す)



第8図 実習の強化を希望する人の割合

り上げられたことがある (1973年)。現象に関すること以外では, 教育現場からの要請としての気象実験がある。特に, 1971年の気象実験の実習が非常に参考になったことを記した人がいる。また, 気象庁業務への関心も高く, 今回台風来襲のため見学が中止になったが, それでもなお何らかの方法で見学できなかったかという希望も少なくない。

講義・実習の方法に関することでは, 実習の強化を望む人が多い (第8図)。特に教員では33%に達する。その中味は, 実習の時間をたっぷり取って欲しいというのが圧倒的で, 全講義に必ず実習を対応させよ, というものもある。その他の目立つ意見は, 前述したように, 「講義の間に短い休憩をとるように」(6名), 「黒板が見にくい」(4名), 「専門用語の説明を十分に」(6名)などで, 「マイクは手で持つものではなくフック式にし

たらどうか」などという意見もあった。

期間など講義の外枠的条件については、「昼休みが長すぎる」(5名)という意見が目立つ。開催時期についての意見は6名いるが、内容は、8月中、春休み中がそれぞれ3名、その他冬休み中、7月前半などの意見だが、「7月29日から夏休みに入る学校もある」という意見は考慮しなければならないだろう。「期間をより長くして欲しい」(5名)、「予習のためにテキストを早く入手したい」(3名)などという熱心な意見も多い。「地方開催の希望」も3名あった。

理科担当の教員の人には、教育現場での経験からみた夏季大学の講義や気象学会に対する意見を求めた。夏季大学に対しては「授業に役立つ実践的な内容」を望む声が高く、「小・中・高の気象教育の内容を検討して」夏季大学の企画を行なうべきとする意見がある。具体的には、観測資料のまとめ方や、「手で触り目で見える」実験や屋外実習の指導法を求めており、夏季大学において教育現場での気象実験・実習の経験交流・実践報告を行なったらどうかという意見もある。教員の場合、全体として実習の強化を望む声は強いのだが、特に教育現場で利用する立場からのものであることがはっきりしている。「一昨年、第10回夏季大学の講義内容を授業で用いた。それは最近の研究成果が入ったものだったので心強く感じたので。」という教育実践報告的意見もあった。以上のような意見を夏季大学でどのように生かすべきかということはその易しいことではないのだが、過去の夏季大学では今回以上に教育現場向け色彩の強いものがなかったわけではない(1975, 77年)。その他の留意すべき意見

としては、「教育現場で欲しい出版物や資料の入手法、信頼できる測器の案内」(6名)や「昭和57年度から理科Iが必修になるので、その準備として、地学以外の理科教員に対して講義して欲しい」というものや、「教員と学生を分離」したらどうかというものがある。

以上のような直接に夏季大学に関すること以外の意見としては、一般に、出版物、資料(写真フィルムなどを含む)などの入手法、気象庁図書館の利用法、気象庁の見学の仕方などの質問が多く、今回は講義の合い間に口頭で説明したが、やはりテキストのどこかに刷り込むなど丁寧な説明をした方がよいだろう。このようなことは一度聞けばわかることだが、初めての参加者が多いので毎回説明が必要である。また、会場での出版物の紹介、販売についての希望も少なくない。

以上まとめるならば、アンケートに見る最も特徴的な問題は、小・中・高教育現場からの要請にどう答えるか、また一方、学生を中心としたアマチュアから専門家に近いところまでに幅広く分布する気象学そのものの愛好者、研究家の希望にどのように答えていくか、である。夏季大学の期間延長、複教教室などがすぐ考えられるのだが、主催者側からみれば、それはすなわち、人的・財政的負担の問題でもある。そして特に重要なことは、気象教育の内容・方法の再検討・実践的研究とそこで果たすべき気象学会の役割について、気象学会だけでなく、当の教育担当者の英知と経験が広く集約されねばならないということである。これは単に夏季大学の問題としてではなく、気象教育と普及の委員会の今後の最も重要な課題の一つであろう。